

〔松平信綱公言行録〕大猷院様家光御代、御臺所より出火、御城のこらず焼失、其時火急なるに付、奥方女中衆大勢、西丸へ御移しなされ度旨、上意なれども、女中衆の事なれば、御殿の内、西丸への道筋、同道の人少しこまりなざる、所に、信綱公御前へ參玉へば、此由如何なされべくやと上意に付、即時に御請、仰上げらるゝは、畏り奉る、左様に思召るゝならば、御奥方より西御丸迄、御道筋へ御疊を、一々裏返し敷て參り候様に仰付られ然るべく存奉り候、左あらば、道筋疑敷あるまじと仰上られければ、御機嫌にて、奥方へ仰つかかわされける、信綱公は大勢人を召連玉ひ、早速御疊をしきければ、誰案内なしに、女中一人も怪我なく、西丸へ退玉ふ也、上様殊の外御機嫌なり、聞人扱々文珠とても、此上の智恵は有まじと申ける、

〔藩翰譜長澤〕此人信綱の才敏なりし事ども、世に傳ふる事いくらといふ敷を知らず、されども

其事共天下の大勢に預からぬ事なれば、誠に數ふるにたらず、初め左大臣家家光かくれさせ玉ひ、將軍家家綱いまだ御幼稚の時に、故將軍家の御時は、國をも郡をも玉ひ、祿をも俸をも當て行なはれし事、年々月々に絶えず、當代に至て終に其事なし、かくては如何で奉公の勞をもなぐさめ、主に仕ふる忠をも勸めんやと、諫むる人も誘る人もありけり、信綱是を聞て、君いまだ幼なく、渡らせ玉ふ、今に當て功勞ある人に恩賞行はるゝ事あらんに、たとへ恩賞を蒙る人悦ぶ事ありとも、又誘る人は、君はいまだ幼稚にてまします、是皆執政等がひいきに付て、おのれくがかたざまの人々をのみ執し申すなりなど云はんには、善を勧め徳を施すにはあらず、恨を加ふにこそあれとて、將軍家政をみづからし給はざりし程、信綱が世に在りしうち、終に其事なかりしかども、人ごとに敢へて怠たりたゆむ心なく、夙夜しけり、是一天下の大名の、代々たてまつりし人質を、此時に至りて盡くに歸さる、是二、近世の慣はしなりし、殉死の事堅く禁せらる、是三、中にも明曆の火災には、城廓盡く灰燼となり、人民悉く焦爛すかゝる事は、古より聞も傳へず、又後